

INDIA & JAPAN

時空を超えて、南インドと九州を結ぶ



Sarasvati

サラスヴァティ 02

● 発行人／坂田マルハン美穂 ● 発行元／ミューズ・クリエイション (NGO) ©2026 Muse Creation 2026年8月



ヒンドゥー教の最高神のひとりであるシヴァ神の化身だとされるタミル・ナドゥ州の霊山、アルナーチャラ。2023年8月29日の朝の情景。石畳が敷かれたアルナーチャラの山道を素足で登る途中、石工職人が露店を広げていた。左の彫像は、彼がアルナーチャラの石に掘ったという手のひらサイズの「ナタラージャ」。ナタラージャとはシヴァ神の異名で、舞踏王を意味する。宇宙のリズムや生命の循環、生と死、創造と破壊などを表現している

破壊と再生の8月。

戦争を巡る日本とインドの奇縁



- ❖ 「サラスヴァティ」とは、学問や音楽、芸術、弁舌などを司るヒンドゥー教の女神で、日本の「弁才天」の起源です。
- ❖ 「ミューズ」とは、ギリシャ神話に登場する芸術や文芸、学問、歴史、天文学などを司る9人の女神の総称。ミュージックやミュージアムの語源です。

www.museindia.org

ミューズ・クリエイションは、日本とインドの文化交流や地域社会への貢献を目的に、2012年、坂田マルハン美穂によって創設された慈善団体です。



～破壊と再生の8月～

1. 8月に思うこと
2. 8月15日を巡る日本とインドの縁
3. インドとパキスタンの分離独立①
4. インドとパキスタンの分離独立②
5. インドの独立運動家たちと日本

6. スバス・チャンドラ・ボースと朝子さん
7. 東京裁判とインドのパル判事
8. B-29 爆撃機「エノラ・ゲイ」
9. 友好の証としての象たち
10. 旅するミューズ／台湾
11. 8月にまつわる個人的な体験

From the Editor 8月に思うこと

生と死の歴史が渦巻く8月に。未来に希望をつなぐため、過去を顧みる

「歴史の80年周期説」というものがある。世の中は、戦争などの危機や社会の転換期を体験した世代が姿を消すころに、似たような歴史を繰り返すという考察だ。歴史は語り手や解釈によって生き物のように変化する。普遍的でもない。情報の取捨選択や、善悪、正誤の判断が不可能なものも多々ある。しかし歴史を知ること、同じ轍を踏まない道を選べるとも思う。

8月は、多くの日本人にとって、戦争の記憶が呼び覚まされる月だ。わたしが小学生だったころ、夏休み中の登校日には戦争教育が行われた。戦争にまつわる映画を見て、原爆の悲劇を歌い、家族や先生から戦争の体験談を聞いた。6年生の修学旅行では、長崎を訪れた。原爆資料館で、わたしは原爆の被害を伝える遺品や写真を正視することができず、館内の床をずっと見つめ、友人の足の動きを頼りに移動した。広島原爆を描いた漫画『はだしのゲン』を読んでいる間は気が重かった。戦争教育もまた難しい。しかし伝えることは大切な。

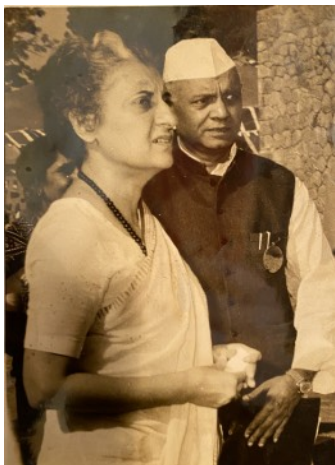
今月の『サラスヴァティ』は、2号目にして、かなり重いテーマを扱っている。トピックスとページ数の絞り込みに苦心した。日本とインドの交流史において、特に戦争に関する素材は多いのだ。わたしはインドに移住するまで、インドについて、ほとんど何も知らなかった。しかし移住直後から、市場調査や記事の執筆、セミナーなどを実施するようになり、積極的に書物を紐解き、過去を遡り、大勢の人々をインタビューし、インドを学んできた。そして日々、ブログなどに記してきた。その膨大な記録の中から、今回は8月にまつわるトピックスを凝縮

して記している。

わたしが初めてムンバイを訪れた2004年。フォート境界を歩いているとき、焼きたてのパンのいい香りに誘われて、ヤズダニ・ベーカリーに入った。わたしを日本人だと知ったフレンドリーな初老の店主に「ヒロシマとナガサキは、たいへんだったね」と言われた。今まで多くの国を旅してきたが、そんなことを言われるのは初めてで戸惑った。彼に限らず、その後も何人かの友人知人が、当時を悼む口調で、原爆のことを口にした。

なぜインドの人々は、日本に対して友好的なのか。わたしは身近な人たちとの会話を通して、また日本とインドの交流史を明治時代まで遡って調べる過程で多くを学んだ。紐解けば紐解くほど、芋づる式に、縁や絆が浮かび上がる。インドに住むまでは知らなかった、わたしの先祖とインドとの繋がり、あるいは夫の先祖と日本とのつながりは、個人的な関心を強く刺激する。夫の伯父ランジートからは、これまで幾度か家族の歴史を聞いた。それには、彼の伯父が、マレー半島のコタバルで、日本軍の攻撃により戦死した事実も含まれる。また、インド・パキスタン分離独立の渦中にいた夫の母、伯父、祖父母たちのエピソードは臨場感を伴ってわたしのなかに刻まれてきた。

わたしは歴史の専門家ではない。極力、事実誤認を避けるべく配慮している。また、日本、米国、インドに暮らし、世界を旅した経験がある者として、特定のイデオロギーに偏らないよう心がけている。わたしがここに紡いだ記録が、読者にとって少しでも、インドと日本の相互理解の一助になれば幸いだ。



実業家であり政治家、独立運動家でもあった夫の母方祖父DD Puriとインディラ・ガンディー首相



デリー在住の伯父Ranjit Puriは、現パキスタンのラホールが出自。歴史の話を聞かせてくれる (2022)



夫の母方祖母から受け継がれた22金の宝飾品。ラホールから国境を超えてきた。わたしにぴったりのサイズ



第二次世界大戦前は横浜正金銀行の建物だったムンバイのヤズダニ・ベーカリー。歴史的建造物 (2022)

8月15日。日本の終戦記念日とインドの独立記念日が「同じ日」なのは、偶然ではなかった



●きっかけは歴史家ラーマチャンドラ・グハとの出会い

8月15日は、日本の終戦記念日であり、インドの独立記念日でもある。1945年の日本の敗戦から2年後の同じ日、インドが数百年に及ぶ英国統治から「インド・パキスタン分離独立」を果たしたことを、わたしは偶然だと思っていた。しかしある一冊の本を通して、敢えてその日が選ばれた背景を知った。

2007年のこと。わたしはあるパーティで、インドの著名な歴史家ラーマチャンドラ・グハ氏とお会いする機会があった。その際、上辞されたばかりの、“INDIA AFTER GANDHI”という、片手で持てば腱鞘炎になりそうなほど分厚い著書をいただいた。わたしはそのエピソードをブログに書き残していた。

それから5年後の2012年2月。見覚えのない差出人から「グハ INDIA AFTER GANDHI」という件名のメールが届いた。「……ブログをたまたま拝見して、India after Gandhiについて、腱鞘炎にかかりそうな本という、まことに的を射たご紹介をなされていることを知りました。このほど、日本語訳を出版いたしました。このほど、日本語訳を出版いたしました。このほど、日本語訳を出版いたしましたが、腱鞘炎の危険を減ずるために、上下2冊に分けてあります」とある。差出人は翻訳家の佐藤宏氏だった。感激したわたしはお礼のメールを返信後、すぐさま『インド現代史（上下巻）』を、日本のアマゾンから取り寄せたのだった。

●『インド現代史』に記された「8月15日」の真相

『インド現代史』は、プロローグからインド共和国の成り立ちを理解するのに役立つ描写があふれている。特に以下の文章を読んだときには驚嘆し、何度か読み返した。

“一九三〇年ののも、会議派支持のインド人は一月二十六日を独立記念日として祝賀した。しかし、最終的に亜大陸から撤去するとき、イギリスは一九四七年の八月十五日を権力移譲の日とした。この日付は総督マウントバトン卿が、第二次大戦での連合軍に対する日本降伏二周年を記念の日として選んだものであった。総督と権力の座を期待したインド人政治家たちは、一部の人々が主張したように、一九四八年一月二十六日まで待つことを望まなかった。それゆえに、独立は最終的に、ナショナリズム感情よりもむしろ帝国の栄誉心と共鳴する日に訪れたのであった”

この背景を理解するには、当時の状況を知る必要がある。第二次世界大戦後、植民地支配からの撤退を余儀なくされた英国は、権力移譲を進めるため、1947年3月にルイス・マウントバッテン卿を最後の総督としてインドへ派遣した。

マウントバッテン卿はビルマ戦線などで日本軍と対峙した経験から、強い嫌日感情を抱いていた人物として知られる。晩年、自身の遺言書に「葬儀に日本の参列者を絶対に招いてはならない」と明記したほどだ。彼が独立を急ぐにあたって8月15日を選んだのは、自身にとって最大の栄誉である「日本の降伏（敗戦）の日」に重ね合わせたかったからであろう。

なお、引用文にある会議派とは、二大政党のひとつである「インド国民会議」すなわち kongress のことだ。インドが英国統治下にあった1885年、当時、増えつつあった反英勢力を緩和させる「安全弁」として、英国主導のもとに誕生したが、次第にインドの自治と独立を目指す政治組織へと変化した。

● 混乱の中で重なり合った歴史的な日。数奇な縁

我が夫アルヴィンドの伯父ランジートに当時の話を聞いた折、わたしは「マウントバッテンが8月15日へ独立を早めた」というエピソードについて話し、当時の様子を尋ねた。彼によれば、1947年初頭には、すでにラホールでも不穏な動きがあり、英国側が独立を急がざるを得ない切迫した状況だったという。伯父の話を聞いた後、改めて史実を紐解いたところ、当時、宗教暴動は激化の一端をたどっており、独立が遅れれば大規模な内戦に発展、英軍の手に負えない事態になることが懸念されていた側面を知った。

1947年6月4日の記者会見で、報道陣から「具体的な権力移譲の日付はいつか」と問われた際、マウントバッテンは、自身のキャリアで最も輝かしい日本敗戦の日がひらめき「8月15日」と即答したというエピソードも残されている。

日付選定の背景には諸説あり、現地情勢の緊迫も大きな要素であったことは確かだ。しかし、いずれにしても、インドの独立記念日が日本の歴史と結びついている事実には変わりはない。



左から写真映りに対し神経質だったというマウントバッテンの肖像、当時の様子を描いた映画『英国総督 最後の家』(2017)、その撮影が行われたジョードブルのウメイド・バワン・パレス(2017)。1943年に完成したウメイド・バワン・パレスは、当時のマハラジャが飢饉に苦しむ領民の雇用創出のために建設した。現在は王族の邸宅、博物館、ホテル(タージ・ホテルズ)の3つで構成されている

かつて世界最大の富を誇ったインド亜大陸は、なぜ英国統治下で衰退し「分断独立」を迎えたのか

国土を海に守られてきた日本とは対照的に、東西から人や物が流れ込む漏斗（ろうと）のような形をしたインド亜大陸。古来から「絹の道」と「海の道」が交差する要衝として、多様な文化を受け止めてきた。インド発祥のヒンドゥー教や仏教、ジャイナ教、シク教だけでなく、キリスト教やイスラム教、ゾロアスター教などが流入、多様な宗教が共存し、独自の文化や習慣を育んできた。

英国が進出する前のインド亜大陸は、イスラム国家であるムガル帝国（1526～1858）により統治されていた。17世紀の最盛期には、世界全体のGDPの約25%を占める世界最大の経済大国でもあり、欧州や中東、中国などへ高級織物やスパイス、宝石を輸出する一方、世界中から金銀が流入して国内を潤した。第5代皇帝が建造したタージ・マハルは、まさに当時の莫大な富の象徴だといえる。

しかし、1707年に第6代アウラングゼーブ帝が没すると、宗教対立や後継者争いにより、帝国の求心力は急激に低下する。各地の有力者が独立した結果、500を超える大小の藩王国が乱立する事態となった。この不安定な情勢を好機とみた英国は、各藩王国と個別に条約を結ぶ「分割統治」を推し進めた。英国は、インド亜大陸全域を直接支配したわけではない。カルカッタ（現コルカタ）を中心とするベンガル地方や、ボンベイ（現ムンバイ）、マドラス（現チェンナイ）などの主要貿易拠点は、東インド会社や英国政府が直接法律を敷いて統治した「英国領インド」であった（地図のピンク色のエリア）。一方、ハイデラバードやマイソール、ラージプータナなど（黄色いエリア）は、藩主が内政を司る半独立状態の藩王国だった。そのほか、ゴアはポルトガルの、ポンディシェリーはフランスの支配下にあるなど、その支配構造は極めて複雑であった。

1757年の「プラッシーの戦い」を皮切りに、1947年の独立まで実質的に続いた英国の支配。この約190年のあいだに、かつての経済大国インドは徹底的に搾取され、世界GDPに占める割合は約25%から約3%まで激減した。伝統的な綿織物業の破壊、ベンガル大飢饉、宗教対立の煽りなど、経済・社会ともに深刻な打撃を受けた。なかでも現在に至る軋轢の要因となったのが、1947年8月15日の「分離独立（パーティション）」だ。インドは「ひとつの国家」としてではなく、ヒンドゥー教徒主体のインドとイスラム教徒主体のパキスタンという二つの国に分断された。この分離独立により、80年以上たった今なお、未解決の課題が残されている。



Map of the political divisions of British India, published in the 'Imperial Gazetteer of India' (1931)

～王国の栄華を今に伝える豪華な宮殿ホテル～



かつて世界唯一のダイヤモンド産地であったハイデラバード藩王国（イスラム教徒の主権者による統治）は、すべての藩王国の中で最大の面積と人口、そして圧倒的な富を誇っていた。現在、ハイデラバードにある「タージ・ファラクヌマ・パレス」は、王国の解体後に荒廃していた宮殿を、タージ・ホテルズが10年の歳月を投じ忠実に修復・復元したもの。2010年に最高級のヘリテージ・ホテルとして再誕した。※右上写真は、宮殿内にある世界最長101人掛けのダイニングテーブル（2012年8月）。

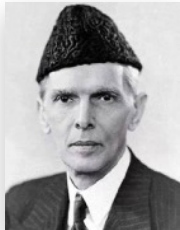


インドとパキスタンをつなぐ主要な陸路国境検問所であるワガ・ボーダー。インド側はアムリトサル西部。毎日、日没前に国旗降納のセレモニーが行われる。すぐ目の前にはパキスタンの群衆。両国の兵士が握手をする姿に分断の不条理を感じる（2019年11月）

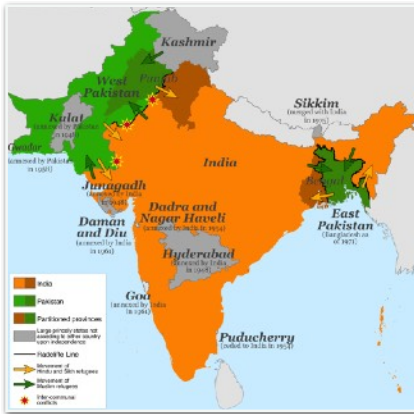


ニューデリーにあるパーティション・ミュージアム。二つの国に分断されたことで、故郷を離れざるを得なかった人々の、無数の悲劇をも垣間見られる（2024年1月）

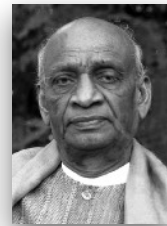
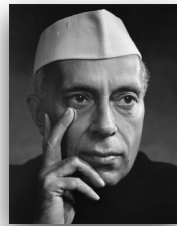
インド・パキスタン分離独立〈パーティション〉の背景



初代パキスタン総督のジンナー。1948年没



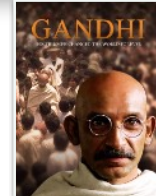
Partition of India 1947 by Planemad / CC BY-SA 3.0



← ネルー（左）とパテル（右）



右上は当時の様子を描いた名画『Gandhi』（1982）。ベン・キングズレーの演技が圧巻



1931年 कांग्रेसが採用したスワラージ旗

●インド国民会議（ कांग्रेस ）が果たした役割

英国によるインド亜大陸の支配は、1757年の「プラッシーの戦い」を皮切りに始まったが、インドの人々が抑圧に甘んじていたわけではない。100年後の1857年に起こった「インド大反乱（セポイの乱）」を端緒に、民族的抵抗運動は段階的に展開されていった。1885年にはインド国民会議（ कांग्रेस ）が結成され、のちの独立運動の核となる。1905年、英国による民族分断を狙ったベンガル分割令に対し、「スワデーシ（国産品愛用）、スワラージ（自治独立）」を掲げる運動の機運が高まった。英国産の工業製品をボイコットし、自分たちの衣料の糸は自ら紡ごうというこの取り組みは、やがてマハトマ・ガンディーの主要なスローガンの一つともなった。

南アフリカで人権運動に身を投じ、インド国内でも名声を高めていた弁護士出身のガンディーは、1915年に帰国。インド全土の実態を把握するため、数年かけて農村部を含む国内を旅したのち、 कांग्रेस に参加した。彼は、それまで知識人中心だった कांग्रेस を、大衆運動組織へと変貌させた。

活動の核となったのは、古代インド思想やヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教の教えに基づく「アヒンサー（不殺生・非暴力）」と、「サティヤグラハ（真理の堅持）」を掲げた非暴力・不服従運動。ガンディーは「スワデーシ」を自ら体現すべく、手紡ぎ・手織りの綿布（カディ）を身にまとった。さらに、英国による不当な塩の専売制に対し「塩の行進（1930年）」を行うなど、民衆を巻き込んだ運動を展開した。

当時の कांग्रेस では、のちに初代首相となるジャワハルラーल・ネルーがガンディーの右腕として民衆を牽引。「史上最強のネゴシエーター」と称されるヴァッラブバーイー・パテルは、500以上の藩王国に対して巧みな外交交渉と圧力を織り交ぜ、インド連邦の統合を促した。一方で、イスラム教徒を牽引する弁護士ムハンマド・アリー・ジンナーは、ヒンドゥー教徒主導の国家に埋没することを懸念して कांग्रेस を離脱。全インド・イスラム連盟の指導者となり、のちにパキスタンの建国者となった。また、急進派のスバス・チャンドラ・ボースは非暴力路線の限界を主張してガンディーと対立した末に離脱し、武力による独立運動を選択した。

●わずか5週間で引かれた国境線と終わらない悲劇

第二次世界大戦で疲弊した英国は、インドへの主権移譲を決定。1947年3月、最後のインド総督ルイス・マウントバッテンが着任した。彼の使命は円滑な独立を実現することだったが、現地では多数派のヒンドゥー教徒が望む「統一インド」での独立と、少数派のイスラム教徒が望むパキスタンとの分離独立とで意見が対立し、各地で宗教間の暴動が発生していた。マウントバッテン、ジンナー、そして कांग्रेस の面々の間で交渉が重ねられたが、最終的に物別れに終わり分離独立が決まった。マウントバッテンは当初の予定を大幅に繰り上げ、同年8月15日を独立の日と定めて突貫作業を開始する。

最大の問題は「国境の線引き」だった。責任者として招かれた英国の弁護士シリル・ラドクリフは、インドの複雑な背景を知らぬまま、わずか5週間で地図上に国境線を引いた（ラドクリフ・ライン）。十分な現地調査も熟慮もないまま定められた国境は、ヒンドゥー教徒やイスラム教徒だけでなく、シーク教徒にとっても不都合極まりないものとなった。

そしてついには、1947年8月14日にパキスタンが、翌15日にインドが独立を果たした。独立前夜、ガンディーは言った。

「明日から我々はイギリス支配の束縛から解放される。しかし今日の深夜から、インドは分断される。明日は歓喜の日であると同時に、悲哀の日でもある」と。新たな国境が公表されると、多くの国民が大混乱に陥った。特にパンジャブと、ベンガルが分断されたことで、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒が国境を越える大移動を余儀なくされた。その数は1,000万人を超え、途上で発生した激しい宗教暴動により100万人以上の命が失われるという、人類史上最悪の悲劇を伴う独立となった。

なお、上の地図にある通り、パキスタンは当初、インドを挟んだ飛地である東パキスタンを含んでいたが（緑色の部分）、西パキスタンによる一方的な政治支配への反発から、1971年、東パキスタンはバングラデシュとして独立した。

わたしの夫の家族はパンジャブ州ラホールに暮らしていたが、ラホールがパキスタン領になったことで、インドへ渡らざるを得なかった。取るものも取りあえず、国境を越えた無数の家族にとって、痛ましい分断の記憶が消えることはない。

日本との協調で結束したインド独立を目指す革命家たちと 武力での戦いを目指したスバス・チャンドラ・ボース



2022年に、バンガロールの骨董商から購入した朝日新聞社の『太陽』。大東亜共栄圏で発行されていた戦時中のプロパガンダ誌だ。この1943年12月号では、同年11月に開催された大東亜会議の様子が紹介されている。東條英機首相はじめ、他国代表と共に、自由インド仮政府の代表としてスバス・チャンドラ・ボースの姿も見られる。

インド国民軍を描いたアマゾンオリジナルの映画『The Forgotten Army』(2020)

●武力で独立を勝ち取るべく、欧州を経て日本へ入国

英国との平和的な交渉によって独立を目指すマハトマ・ガンディに対し、スバス・チャンドラ・ボースは武力行使を主張した。路線対立の末に कांग्रेसを離脱したボースは、国外へ脱出する。最初に彼が向かったのは、英国と対立していたナチス・ドイツやイタリアだった。「敵の敵は味方」の観点から、インド独立に協力してくれるはずだと見込んでいたが、芳しい反応を得られなかった。結果、ボースはアジアで大英帝国と激戦を繰り広げていた日本に望みを託し、渡航を決意する。

1943年4月、ボースはドイツの潜水艦に乗り込み、極秘裏に欧州を離れた。インド洋南西部のマダガスカルに近い海域で、日本の潜水艦へと移乗するという危険な極秘作戦を経て、同年5月、東京の地を踏んだ。翌6月、ボースは東條英機と会談。「インド独立への全面的支援」という約束を取り付ける。

●インド独立運動家たちと福岡の「玄洋社」との関わり

日本ではすでに、数名のインド独立運動家が活動していた。1915年に亡命したラース・ビハリ・ボースや1928年に来日したA・M・ナイールらが中心となり、自由インド仮政府の素地を作った。ちなみに二人は日本に「インドカレー」をもたらしたことで有名だ。スバス・チャンドラ・ボースを含むインド独立運動家が日本で活動できた背景には、アジア各国の革命家たちを長年にわたり後援してきた民間団体「玄洋社」の存在がある。創始者である頭山満の支援は、彼らの命綱だった。

なお、玄洋社の本拠地は我が故郷の福岡で、わたしの父方の祖父は頭山満と交流があったようだ。かつて実家の床の間にかけていた頭山満の揮毫による掛け軸は、今、バンガロールの我が家にある。カレーや玄洋社の話は今後改めて記したい。

さて、スバス・チャンドラ・ボースの来日により、停滞していたインド独立運動は勢いを取り戻した。1943年7月、彼はインド国民軍の最高司令官に就任。「チャロー・デリー（デリーへ進め）」のスローガンを掲げアジアのインド人を鼓舞した。

●日本と深く関わるインド国民軍と自由インド仮政府

1943年10月、シンガポールにおいてスバス・チャンドラ・ボースは「自由インド仮政府」の樹立を宣言、インド国民軍の最高司令官に就任した。翌11月に東京で開催された「大東亜会議」（上の写真は那时的様子）において、東條首相は当時、日本軍が統治していたインド洋に浮かぶアンダマン・ニコバル諸島の政権を自由インド仮政府へ移譲することを表明した。これは国際法上の「仮政府が所有する初の領土」であった。

一方、1941年12月、日本海軍による真珠湾攻撃に先駆け、東南アジアではマレー作戦が始まっていた。日本陸軍の特務機関「F機関」を率いた藤原岩市少佐や、モーハン・シン大尉の尽力により、すでにインド国民軍（INA）は組織化が進んでいた。インド国民軍を構成するのは、東南アジアで日本軍の捕虜となった「英印軍のインド人兵士たち」だった。映画『The Forgotten Army』では、彼らの境遇が描かれている。

●インパール作戦の悲劇。日本の敗戦と、ボースの死

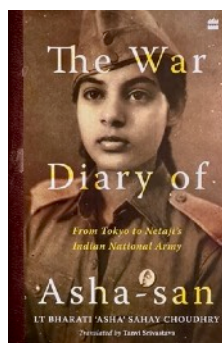
1944年、日本軍とインド国民軍は、インド本土への進攻を目指し、ビルマ（現ミャンマー）戦線から共同で「インパール作戦」を展開する。しかし、無謀な補給ルートと豪雨により餓死者や病死者が相次ぎ、壊滅的な打撃を受ける。多くの日本兵とインド国民軍の兵士たちが非業の死を遂げた。そして1945年8月。広島と長崎への原爆投下直後の15日、日本は敗戦した。

日本の降伏により、インド国民軍の軍事路線が行き詰まったことから、ボースは反英を掲げるソビエト連邦に着目。台北発、大連（満州）経由でソ連入りを予定していた彼は、8月18日、台北の松山空港で航空機事故に遭い、インドの独立を見ないまま、この世を去った。彼の死後、遺灰は、福岡の雁の巣飛行場を経由して、東京へ。しかし「ボース生存説」はまことしやかに各方面で流布されてきた。インド内務省が「スバス・チャンドラ・ボースは1945年8月18日の台湾での航空機事故により死亡した」と公式に結論付けたのは、2017年のことだ。

日本生まれのインド国民軍女性兵士、朝子さんと、スバス・チャンドラ・ボースの遺灰が眠る「蓮光寺」のこと



2022年2月、バンガロールにて。朝子さんと、そのご家族と共に



2023年『アシャの日記』の英訳本が出版された。訳者は孫嫁でライターのTanvi Srivastava



笠井亮平著『インド独立の志士「朝子」』

◎ご縁があって、朝子さんとそのご家族にお会いする

この記事を書いている2026年8月12日は、奇しくも、97歳で天寿を全うされた朝子（インド名アシャ）さんの一周忌だ。わたしが初めて朝子さんのことを知ったのは2016年に出版された『インド独立の志士「朝子」』（笠井亮平著）を通してだった。朝子さんは1928年、ビハール出身のインド独立運動家の父アナンド・モハン・サハイと、ベンガル出身の母サティ・センの間に、兵庫県神戸市で生まれた。独立運動家だった両親は、ネタージー（スバス・チャンドラ・ボースの敬称）と懇意にしており、朝子さんもまた、ネタージーを深く敬愛していた。

シンガポールで、ネタージーがインド国民軍の婦人部隊「ラーニー・オブ・ジャーンシー連隊」を発足したことを知り、朝子さんは入隊を切望する。1945年5月、17歳になったのを機に入隊し、訓練を受け始めた。しかしわずか数カ月後、日本は敗戦。バンコクで終戦を迎えた彼女は紆余曲折を経て、1946年8月に、初めて母国インド（コルカタ）の地を踏んだ。

わたしはご縁が重なって、2022年以降、何度か朝子さんとそのご家族にお会いする機会に恵まれた。朝子さんは普段、息子夫婦とビハール州パトナに暮らしていたが、毎年のように、バンガロールに住む孫一家のもとを訪れていたのだ。わたしの夫の家族とも共通の友人や知人がいるなど、更なるご縁もつながっていた。その後わたしは、朝子さんが10代のころに日本語で記した『アシャの日記』や、『インド独立の志士「朝子」』などの関連資料をもとに、約30分の動画を制作しYoutubeにアップロードした。朝子さんの肉声から、当時の日本とインドの様子がリアルに伝わる内容だ。ぜひ以下をご視聴ください。

◎東京の蓮光寺に眠るスバス・チャンドラ・ボース

1945年8月18日、台北での飛行機事故で他界したスバス・チャンドラ・ボースの遺灰は、現地で火葬されたあと、同行者だったハビーブル・ラーマン大佐によって日本へ運ばれた。しかし、ボースの葬儀を執り行う寺院がなかなか見つからず、その間は、朝子さんの母サティが遺灰を守っていた。同年9月14日、ついには東京都杉並区高円寺にある日蓮宗の「蓮光寺」の望月住職が、葬儀を引き受けた。以来、ジャワハルラール・ネルー首相、インディラ・ガンディ首相、アタル・ビハリ・ヴァジパイ首相をはじめ、インドの要人や関係者が参拝している。しかし、いまだに遺灰は、インドに帰ることができていない。その一方で、ボースゆかりの日本刀は帰国を果たしている。1943年の訪日時、頭山満の斡旋で福岡の有志から贈られた軍刀だ。1967年に元陸軍少将の藤原岩市氏らによりインドへ返還された。現在は、コルカタにあるボースの旧邸宅の記念館「ネタージー・バワン」に常設展示されている。



2022年6月、わたしは笠井亮平氏（左）と、かつて朝子さんを取材された日本経済新聞の記者である岩城聡氏（右）と共にランチをご一緒した。その後、杉並区高円寺の蓮光寺を参拝。写真はそのときのものだ

YOUTUBE/ STUDIO MUSE <https://x.gd/kHpVE>



折しも本日（2026年8月12日）の『Times of India』紙に、スバス・チャンドラ・ボースに関する記事が掲載されていた。ボースとオーストリア人女性の間に生まれたドイツ在住のアニタ・ファフ氏が、蓮光寺に安置されている遺灰をインドへ返還するよう、インド中央政府に求めたという内容だ

時代を超えて問われる法の原則。勝者が敗者を裁けるのか？ 「東京裁判」で全員無罪を主張したインドのパル判事



東京都千代田区にある「靖国神社」は、幕末から第二次世界大戦までの戦没者（英霊）を祀る神社。2013年の一時帰国時に詣でた際、敷地内にある「遊就館」にも足を運んだ。日本最古の軍事・歴史博物館で、英霊の遺品や兵器などが展示されている。写真は、遊就館の入り口付近にあるパル判事の碑



●第二次世界大戦の敗戦国である日本を裁くための裁判

わたしがパル判事の名を知ったのは、インド移住後のまもないころ。それを契機に、東京裁判（極東国際軍事裁判）の背景を学んだ。東京裁判とは、第二次世界大戦後の1946年から1948年にかけて、連合国が日本の戦争責任を追及すべく東京で開催した国際軍事裁判。戦勝国である米国、英国、中国、ソ連、オーストラリア、カナダ、フランス、オランダ、ニュージーランド、インド、フィリピンの11カ国の判事らが集った。

裁判の最大の焦点は、ナチスを裁く「ニュルンベルク裁判」で初めて適用された「平和に対する罪」だった。従来、国際法では国家の行為とされていた「戦争」そのものを史上初めて犯罪とみなし、国家の指導者個人の責任を問う新たな概念である。判事室では各判事の意見が鋭く対立。当初は短期間で決着がつくと予想された裁判は、混迷を極めて長期化した。最終的に、東條英機元首相ら指導者（A級戦犯）に有罪判決が下される。彼らは巣鴨プリズン（東京都豊島区東池袋）に収容され、死刑判決を受けた7名の執行もここで行われた。

●インドのパル判事が全員の無罪を主張した背景

この裁判にインド代表として参加したのが、法学者のラダビノード・パル判事だった。彼は11人の判事の中で唯一、被告全員の無罪を主張した。しかし彼は、日本の戦争行為や暴力を容認したわけではない。彼が異議を唱えたのは、戦勝国が自分たちにとって都合のいい法律（事後法）を後から作り、敗戦国を一方向的に裁くという「不公正な仕組み」そのものだった。また彼は米国による広島と長崎への原爆投下を、強く非難した。

時が熱狂と偏見とをやわらげた暁には
また理性が虚偽からその仮面を剥ぎとった暁には
その時こそ正義の女神は
その秤を平衡に保ちながら過去の賞罰の多くに
そのところを変えることを要求するであろう

石碑に刻まれた東京裁判のパル意見書を締めくくる一節。米南北戦争に敗れたJ・デイヴィスが、未来の歴史的評価に望みを託した言葉の引用

見応えあり！ NETFLIX『東京裁判』(2016)

今から10年前、NHKが手がけた全4話の国際共同制作ドラマ。政治的偏向を排し、リアルなドキュメンタリータッチで仕上げられた作品だ。主演級のパル判事役は、私の大好きな名優、故イルファン・カーンが演じている。彼の重厚な演技に加え、当時の本物の記録映像を自然に織り交ぜた演出が秀逸で、全編に強いリアリティを与えている。東京裁判の緊迫した舞台裏を追体験できる本作は、現在、NETFLIXで配信されている。



広島に原爆を落とした「エノラ・ゲイ」を見た日の記録

ワシントンD.C.に住んでいた2004年2月のこと。わたしは、ワシントン・ダレス国際空港の近くにオープンしたばかりの Smithsonian 航空宇宙博物館の別館を訪れた。エノラ・ゲイを、見るためだ。レプリカではない。1945年8月6日、原子爆弾「Little Boy」を運び、広島上空から投下したB-29、エノラ・ゲイの「実物」である。



1945年8月6日。流線形の、大きく美しいその飛行機は、澄み渡った青空の中を、太陽の光を反射させながら飛んだ。そして午前8時15分。広島上空でぽっかりと爆弾倉を開き、「Little Boy」という名の新型の原子爆弾を落とした。原爆は、上空約600mで炸裂し、夥しい数の人々を燃やした。あの朝の広島、この世の地獄を、ここでは知る術がない。

22年前の寒い朝。わたしはひとり、ヴァージニア州へ車を走らせ、Smithsonian 航空宇宙博物館の別館へ赴いた。巨大なメタリックの建物が、青空に映えてまばゆい。わたしは、身構えるような心持ちで車を降り、エントランスへ向かった。

エノラ・ゲイ。罪なき十数万人の命を一瞬にして奪った、残酷な飛行機。それを見るのだと思うと息苦しい気持ちになる。受付でパンフレットを受け取り、足早に展示場へ赴く。第二次世界大戦のコーナーは、入館してすぐの場所を占めていた。

まず目に飛び込んだのは、ひときわ大きく存在感のある銀色の爆撃機だった。尾翼に大きく「R」の文字があり、胴体には「82」という数字と星印。その爆撃機の下に、日本やナチス・ドイツの軍用機が、睥睨されるかのように展示されている。

「1941年、日本軍による真珠湾攻撃を機に、米国は第二次世界大戦に参戦した……」という文章で始まる案内を一通り読んだあと、まずは日本の戦闘機を眺める。翼が極端に小さいそれは、特攻隊が乗った「桜花」だ。生還を考慮しない設計のため、着陸用の車輪がない。「終戦までに約4,000人のパイロットが特攻によって戦死した」とも記されている。

さて、エノラ・ゲイはいったいどの飛行機なのだろうと、コーナーをぐるりと回り込んで、息をのんだ。最初に目に飛び込んできた、あの銀色の飛行機の操縦席近くに、「ENOLA GAY」という文字が記されているではないか！

エノラ・ゲイは、醜くも忌々しくもなく、むしろ大きく、美しかった。Boeing B-29 Superfortress Enola Gay。このB-29

というタイプの爆撃機が、太平洋戦争でいかに活躍した優秀な航空機であったかが記されている。1945年の8月6日、この飛行機が最初の核兵器を日本の広島に投下したこと、その三日後に、同じ機種でBockscarと名付けられた爆撃機が、日本の長崎に二つ目の核兵器「Fat Man」を投下したこと、そしてそのBockscarは、オハイオ州デイトン近くの航空宇宙博物館に展示されていること、なども。

わたしはエノラ・ゲイの間近に迫り、下から見上げた。全身をジェラルミンで覆われた、軽量で丈夫な爆撃機。わたしは、その胴体のあたりを見つめた。あの扉が開いて、原爆が投下されたということが、現実のこととは思えない。呆然とした気持ちのまま、今度は階上にあがり、至近距離で操縦席を見た。中の様子が、はっきりと見える。……エノラ・ゲイを見たら、もう、あとはどうでもよかった。エール・フランスのコンコルドとか、フェデックスの古い貨物輸送機とか、パンナム航空の飛行機などが展示された商業用航空機のコーナーを横目で見ながら、出口へ向かう。途中で足を止めたギフトショップには、エノラ・ゲイのプラモデルや模型が売られていた。

飛行機に、罪はない。その当たり前のことが、実際に、自分の目で見て腑に落ちた。罪は人間が創り上げるものであって、人間の中にある。

エノラ・ゲイの展示方法に関しては、当時、米国内でも論争が巻き起こっていた。原爆の惨禍を伝えたい学芸員側と、原爆が戦争を終わらせた主張する米退役軍人会や議会が激しく対立。結果、広島や長崎における被爆関連の展示は全面中止となった。これに対し、日本の被爆地は「被害の過小評価だ」として、強い失望と抗議を示した経緯がある。

今、わたしは過去の記録を紐解いて自分の文章を推敲し、CD-Rに焼いていた画像を開き眺めている。あの日の困惑も鮮やかに、わたしは今なお、この展示に対する印象を、うまく言葉にできない。ただ、この目で見ておいてよかったと思う。

日本の子どもたちから手紙を受け取ったネルー首相。 カルナータカ州の象「インディラ」を、日本へ贈る。

Uncle Nehru, Please Send An Elephant!
(Tulika Books)



1957年10月。ネルー首相と娘のインディラ・ガンディが来日。
上野動物園で、象のインディラと対面した

●日本の子どもたちからの願いを受けて、象が贈られる

『かわいそうなぞう』という絵本を知る日本人は、少なくないだろう。第二次世界大戦中に上野動物園で命を落とした象たちの物語だ。1943年、東京都長官の発令により、空襲で檻が破壊された際の猛獣逃亡を防止すべく、動物たちが殺処分された。ライオンやクマ、トラは毒殺されたが、3頭の象は毒入りの餌を食べない。結局、餓死させるしかなかった。餌を請いながら芸をする象らに、飼育員たちの悲しみと怒りが炸裂する。この猛獣処分の裏には、国民の戦意高揚や危機感を煽るための行政によるプロパガンダだったという説もある。

やがて敗戦。困難な暮らしの中にも希望が戻り始めたころ。1,000人を超える東京の子どもたちが、自分たちのおこづかいで切手を買ひ、ネルー首相に手紙を送った。それは、日本の動物園に象を送ってほしいというお願いのメッセージだった。

インドは、1947年に独立したばかりで、ネルー首相は多忙を極めていたが、子どもたちの声を受け止めた。カルナータカ州の古都マイソールに近いカビニの森に住む象が選ばれ、ネルー首相の娘と同じ「インディラ」と命名された。彼女は、1949年6月30日、バンガロールで行われた盛大な出発式を経て、日本へと輸送されたのだった。

1949年9月、列車や船での長い旅路の果てに、インディラは東京に到着。1万人を超える子どもたちが動物園に集まり、彼女を歓迎した。インドからインディラに同行していた象使いたちは、カルナータカ州のローカル言語であるカンナダ語で象に語りかけてきたことから、日本の飼育員たちにカンナダ語でインディラに指示する方法を教えたという。

●飼育係の落合さんと、インディラとの強い絆

インディラが日本に暮らし始めて何年も経った1967年のある日のこと。20年近くも同じ象舎で暮らしていたジャンボとケンカをしたインディラは、何かのはずみで象舎の周囲の堀に落ちてしまう。彼女は象舎に戻れず、外に出てしまった。興奮した彼女は動物園の中を歩き回り、周囲はパニック状態に。飼育係たちがインディラを象舎に戻そうとするも、うまくいかない。

実はインディラが日本に来て以来、ずっと彼女の世話をしてきた落合さんという飼育係の男性がいた。彼らは家族のように、強い信頼関係で結びついていて、しかしそのとき、落合さんは、末期の胃癌を患っており、自宅で療養していた。動物園側はそのことを承知のうえで、インディラをおとなしくさせる方法を教えてほしいと、落合さんの家へ向かったのだった。

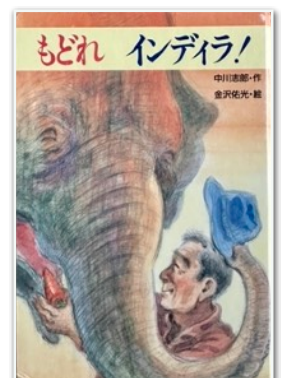
話を聞いた落合さんは、「おれが行こう!」と、よめきながらも立ち上がり、半年ぶりに動物園へと向かった。最初インディラは、やせ細った姿の落合さんを見ても気づかず、背を向けようとした。しかし「インディラ、おれだよ!」と落合さんが叫んだ瞬間、インディラはハッとして落合さんを見つめた。

一瞬にして緊張感を解いた彼女は、静かに落合さんに近づき、甘えた声を出しながら、落合さんに頬擦りをした。「もどろろ、インディラ」という落合さんの言葉に従い、おとなしくゾウ舎へ戻ったという。落合さんは「うちの娘が、ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」と、周囲の方々に挨拶をしたあと、車に乗り込んで帰路に着いた。そのときインディラは、「おおん、おおん、おおおん」と大きな声で鳴いた。

落合さんはそのわずか8日後に、この世を去った。看取った落合さんの妻によると、彼の最後のことは、「インディラ……」だったという。

●象のインディラと、インディラ・ガンディの死

1983年8月11日。30年以上にわたり何百万人もの日本人に愛されたインディラは、穏やかに息を引き取った。翌月の9月20日。インディラ・ガンディ首相は、2頭の象、Asha（希望）とDaya（優しさ）を上野動物園に贈った。その1年後の1984年10月31日。インディラ・ガンディ首相は暗殺され、この世を去ったのだった。



1988年の台湾。初取材で知った歴史の重みと小籠包の味

就職して半年が過ぎたころ、わたしは初の海外出張を命じられた。行き先は台湾。この取材を通して、わたしは取材先の歴史を学ぶ重要性を思い知ったのだった。

●日清戦争に勝利した日本は、台湾を割譲され統治を開始

1868年の明治維新を契機に近代化の扉を開いた日本は、「富国強兵」をスローガンに軍事力を高めた。1895年、日清戦争に勝利し、下関条約により台湾を割譲され統治を開始した。以降、1945年に日本が敗戦するまでの50年間にわたり、台湾は日本だった。つまりこの半世紀の間に台湾で生まれた人は、日本名を受け、日本語を話す日本人だったわけだ。

1945年8月15日の終戦後、日本は撤退。同年10月25日の「台湾光復節」をもって、台湾は正式に中華民国へ編入される。しかし、長年日本統治下で近代化を経験してきた台湾の人々と、戦禍の大陸からやってきた中華民国（国民党）の軍民との間で、日本統治時代とは異なる摩擦が生じていた。

●中華人民共和国と中華民国（台湾）。二つの中国の背景

辛亥革命によって清朝が滅亡したあと、大陸で樹立されたアジア初の共和国である中華民国。やがて中国大陆で毛沢東率いる中華人民共和国が勢力を強めると、蒋介石は大陸の政治家や文化人、北京の紫禁城にある故宮博物院の至宝などを台湾へと移した。そして1949年、台北を臨時首都と定める。こうして、大陸の中華人民共和国と台湾の中華民国が並立する「二つの中国」の歴史が始まった。台湾には1949年から1987年まで、政治統制として、38年間にわたる長期の戒厳令が敷かれた。

中華人民共和国と日本の間では、1972年に「日中共同声明」が調印されて国交正常化が実現、友好の証として中国から上野動物園にパンダのランランとカンカンが贈られた。当時、パンダが日本中で大ブームとなり、さまざまなキャラクターグッズが人気を集めていたものだ。一方で、中華民国（台湾）と日本との国家間の公式な外交関係は、事実上、断絶することとなった。両国は公式な空路を失ったが、「日本アジア航空」という日本航空の子会社が、空の路を繋ぎ止めた。

●日本統治時代の面影が残る台湾各地を取材する

わたしが取材で台湾の地を踏んだのは、蒋介石の息子である蒋経国によって、戒厳令が解かれた翌年の1988年11月のことだ。当時の日本では、日本アジア航空が「女性にやさしい台湾」をキャッチコピーに、華やかな旅の広告を打ち出していた。その新風の延長線上に、わたしたちが手がけた『台湾の本』の創刊企画があった。自分と同じ23歳の女性編集者と、外部のカメラマン2人とで台北へ飛び、2班に分かれての取材が始まった。240ページのガイドブックを制作すべく、台北、高雄、台中、台南、花蓮、墾丁などを3週間かけて巡る強行スケジュールだ。バックパックに山ほどの資料を詰め込み、連日、レストランや店舗、観光地、ホテルなどを何十軒も巡った。台北での通訳を務めてくれたのは、日本統治時代に生まれ育った初老の男性だった。



1988年11月。鼎泰豊の本店で食べた小籠包のおいしさに感動したものだ

当時はまだ、台北の随所に日本統治時代の面影が色濃く残っていた。裸電球が吊るされた古い西門市場の、事務所の壁に飾られた日本人の創業者の色褪せた写真を見て、何とも言えぬ気持ちにさせられたものだ。取材中に印象に残った場所は多々あるが、中でも中国大陆から運び込まれた膨大な美術品を所蔵する国立故宮博物院のスケールには圧倒された。いつかまた再訪したいと思う場所のひとつだ。

●忘れ得ぬ、胃袋の記憶。中国各地の料理に感動の毎日

取材中は毎晩、資料整理に追われ、数時間しか眠ることができない一方、毎日、新しい情報に晒されて、心身ともにいっぱいだった。慢性的な疲労に襲われていたものの、初めて口にする中国各地の料理のおいしさには、疲れが吹き飛ばさずだった。蒋介石が台北を臨時首都と定めた際、中国本土各地の名シェフを連れてきたというだけあり、街には台湾料理はもちろんのこと、北京、広東、四川、上海、湖南……と、大陸各地の本格的な料理が揃っていた。また茶藝館で口にした凍頂烏龍茶の芳香に、烏龍茶の概念を覆された。

たとえ写真撮影を終えて冷めたものであっても、それらは最高のごちそうだった。数ある食の記憶の中でも、ひときわ印象に残っているのは、今や世界各地に店舗を持つ「鼎泰豊（ディンタイフォン）」だ。繁華街沿いにある古びた3階建てのその食堂は、早朝の開店時からすでに地元の客で熱気に満ちていた。「小籠包（しょうろんぼう）」という言葉さえ、日本にはまだ届いていなかった時代。テーブルに、定番の豚挽肉の小籠包をはじめ、蟹味増入り、青菜入り、あんこ入りと、次々に蒸籠（せいろ）が運ばれてくる。蓋を開ければ、立ち上る真っ白な湯気と食欲をそそる芳香！ このときほど、カメラマンの撮影時間が長く感じられたことはない。

社会人として初の海外取材先となった台湾。各地で日本統治時代の残像を目にし、未知なる世界の入り口を目の当たりにしたこの旅は、わたしにとって「世界を見る目」を養うきっかけになったのだった。

わたしの人生を変えた1985年8月の米国ホームステイ

海と山に抱かれた下関市の小さな女子大。将来は福岡で、高校の国語教師になることを目標に、日本文学部の教職課程に進んだわたしは、日本の純文学を読み漁る一方で、海外への憧憬を募らせていた。1985年、20歳の夏。バブル経済に賑わう世間から隔絶された田舎で、午後7時の寮の門限に息を詰まらせた籠の鳥は、自ら扉を開け放ち、太平洋を渡り、カリフォルニアへと羽ばたいた。旅行会社が主催する1カ月の語学留学&ホームステイプログラムに参加したのだ。わたしにとって、それは初の海外旅行だった。

「日本は狭い。小さな国だ」と言われても、日本しか知らないわたしにとって、玄界灘は広く、阿蘇山は大きかった。しかし、その尺度は、ロサンゼルス国際空港に降り立った瞬間に吹き飛んだ。周囲を歩くのは、それぞれに異なる肌や髪の色をした人々。わたしたちのスーツケースをカートで運ぶボーターの黒人男性の、見たこともないほど大きな靴。日本では大柄な自分が華奢に見えるほど、縦横に大きい女性たちが行き交う。見上げれば、どこまでも青く広い空。延々と連なる山脈……。

この1カ月間に見聞きしたあらゆるものが、わたしの中の常識や価値観を、ことごとく打ち砕いた。大きな存在を知って初めて小ささを知る。テレビや活字では知り得ない、実物大の衝撃。わたしはこのときはじめて、「尺度（スタンダード）」という言葉の曖昧さを知った。「大きい」「小さい」という単純な尺度でさえ、普遍のものではないのだということ。



1985年8月の記憶は、ファイルの中で、今でも色褪せず残る



お別れ会にて、ホストファーザーと次女のクリスタと共に



日本への帰路に着く前に。お世話になった語学学校の先生と

数十名の日本人学生は、ロサンゼルス郊外の実家にホームステイをし、平日は語学学校に通った。わたしがお世話になったのは、モンロー家。ホストマザーとは、渡米以前から何度か手紙のやりとりをしていた。父親はロス市警の刑事。長男、長女、次男、そして次女の6人家族だ。まだ5歳だった次女のクリスタは、英語が下手でうまく話せないわたしに対し、まるで自分がお姉さんのように世話を焼いた。家の中を案内したり、ご近所さんへの「挨拶回り」に連れ出してくれたりもした。

初めての異国での食生活もまた、新鮮な驚きに満ちていた。敬虔なモルモン教徒だったモンロー家では、教義に従って料理にほとんど調味料を使わなかった。食卓には塩と胡椒が出され、丸ごとのトウモロコシや、蒸しただけのマッシュドポテト、挽肉だけのハンバーグなどに、自分で味をつけて食べるのだ。決して美味とは言いがたかったが、稀有な経験だった。一方の外食では、毎回ポーションの大きさに驚いたものだ。

日本へ帰国するころには、将来の自分が福岡で国語教師をしている姿を想像できなくなっていた。「このパスポートが切れる前に、わたしはまた必ず海外を旅する」と、カリフォルニアの空の下で誓った願いは叶い、わたしは大学卒業後に上京。海外旅行誌の編集者として、社会人の第一歩を踏み出した。この米国旅行の延長線上に、わたしの「今」は連なっている。

Editor's Note 編集後記

再び「編集者」に戻れた喜び。

先月『サラスヴァティ』を創刊したことで、わたしの中で大きな変化がありました。20数年ぶりに再び自分を「編集者」と呼べるようになったことです。印刷を想定しての執筆は、オンライン上での執筆とは異なる緊張感を伴います。何度も校正を重ねた仕上がりを自宅で印刷し、製本した『サラスヴァティ』は、愛おしさも格別。今月から印刷所で数百部ずつ、印刷する予定です。製本された『サラスヴァティ』を希望

される方はご一報ください、今後、何らかの形でお送りします。当面は、日本語と英語の両方をホームページ上にアップロードしますので、ご自由にダウンロードしてください。周囲の方々にもシェアしていただければ幸いです。

2026年8月15日 インドと日本の節目の日に
坂田マルハン美穂
muse.india@me.com

『サラスヴァティ』の英語版、日本語版、バックナンバーなど、ここからダウンロードできます

